

佐藤一斎著、川上正光全訳注「言志四録(一)―全四巻―」講談社学術文庫、講談社 1978年8月10日刊を読む

人事と天命

〔訳文〕

1. 何事をなすにも、人事を^{つく}尽して天にまかすがよい。
2. (1)ここに、人がいる。
 (2)平素横^{おうちやく}着で怠け者である。
 (3)「いくら働いても無益だ。運命は天次第である」といっているのでは、何事も成功しない。
 (4)思うに、天がこの人から魂を奪い去ってこのようにしているのだ。
 (5)これもまた運命だ。
3. (1)もう一人は、平生慎しみ深く勤勉である。
 (2)「人の^{つと}務むべき道理は^あ飽くまで尽さなければならない。しかし、運命は天の定め待つ」といっているから、仕事は必ず成功する。
 (3)恐らくこのような人に対しては、天がその人の心を誘導してこのようにさせているのである。
 (4)これもまた運命である。
4. (1)ところが、人事を尽しても、成功しない人がいる。
 (2)これは道理の上では成功するはずであるのに、天運がまだ至らないものである。
 (3)したがって、天運が来ると直ちに成功する。
5. (1)反対に、人事を尽さない人で、偶然に成功する者もある。
 (2)これは道理上からは成功しないはずであるが、運命がこの人に来たのであって、^{つい}終には失敗するであろう。
6. (1)以上を要するに、皆運命である。
 (2)成功・失敗がその人自身に現われないで、その子孫に現われることもある。
 (3)これは『^{せきぜん}積善の家に^{よけい}余慶あり、^{よおう}積不善の家に^{よおう}余殃(災)あり』ということである。
 (4)これも天運の^{しか}然らしめるものである。

〔付記〕

- (1)貝原益軒^{かいげらえきけん}の初学知要に、「人事を尽して、^{まか}しかる後に天命に委す也」とある。
- (2)また、西郷南洲は「人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己を尽して人を^{とが}咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし」と訓している。

(3)さらに、夏目漱石は「則天去私」といった。

*いずれも同様な心境を表現したものと思われる。

P280 ~ 281

<コメント>

佐藤一斎が42歳から80歳にかけて、およそ40年にわたって書き続けた「言志四録 全四巻」のうちの、第一巻の最後から2番目の文章。「人事を尽して天命にまかす」という考えを世に広めた文章。この第一巻の「言志録」は42歳の時の作。是非、御一読を。

— 2016年8月5日(金) 林 明夫記 —